

日付:2015年11月1日／聖書:エレミヤ書24:1～10

説教:「主は問う『何が見えるか』と」

ユダ国は戦争に敗れ、多くの民が他国へ捕囚の民として連行されて行った。その状況の中で、残された民は“幸い”とし、連行された民は“不幸”と見た。時に戦争は民を引き裂くという残酷な状況を生む。戦争において勝者が敗北した民を強制連行し、奴隷化することが様々な戦争の中で起きている。日本がアジアにおいて戦争を繰り広げ、勝利する状況の中で、朝鮮半島、満州国、中国と侵略戦争を行い、多くの住民を強制連行した。戦後、強制連行された方々が、自国に戻ることが出来ずにそのまま日本に残る選択を余儀なくされた人々が多い。

私たちは、大きな社会情勢の中に取り込まれる中で、社会的に強者と弱者に分けられてしまうということがある。ユダ国が戦争によって多くの民が他国へ連行され、捕囚の民とされていく状況の中で、残された民は、幸いとし、連行された民は、不幸と見た状況があった。そして残された民は、自分たちは神に守られたのだ、連行された民は神から見放されたのだ、・・・そんなふうに思い込み、残された民は、自分たちは幸いだ、幸いだと喜ぶ状況にあったわけであるが・・・。神は、そういう考え方をする人々、そういう視点に立つ者を最も嫌うということが、今朝の聖書に記されているのである。

今朝の聖書は、神が常にどういう立場に居られ、どういう側に立っておられるかを示しておられるところである。旧約の神も、新約の神も一つだということ。マタイ福音書25章40節の言葉を思い出される。《はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。》

神は、私たちにも問うであろう。「何が見えるか」と。その時、神が見ておられる事と、私たちが見ていることが、果たして同じものであろうか。私たちが、何を見、どこに立っているのか、神は私たちにも問う。私たちは、常に悔い改めと謙虚な思いを持って、神が見ておられるものを、見させて頂きたいものである。(神谷)